20周年を迎えるに当って

井伊谷 鋼 一

Koichi Iinoya

本会も中部粉体工学研究会として発足以来すでに20年を経過しようとしていることは私事ながら感慨無量であります。その間多くの同好同学の士が集まり、会の運営についてもそれぞれ得意とする才能を発揮して、企画に、編集に、庶務に、経理にそれぞれ苦心と努力をかさね、本会もどうやらここまで生き残ったという感じであります。今迄はどちらかというと高度生長経済下で比較的めぐまれた環境にあったと思われませんが、これからは低生長下の産業界の影響をうけて会の運営も苦しくなることでありましょう。したがってこのような小さな学術団体もその運営が一つの曲り角にきている時期ではないでしょうか。この機会に2、3の問題について思いつくままをのべて会員の方々の御批判を頂きたいと思うわけです。

粉体工学はここ2、30年にわたって発達し、やや形をなしてきたわけですが、化学工学の機械的単位操作と可成りその範囲を同じくする一方、その基礎となる粉体物性や計測制御の応用については独自の分野をもち、広く工学一般から、農学、理学あるいは薬学、医学にも深い関連をもっておりますことは御承知の通りであります。したがって従来の縦の学術体系ではなく、新しい横の連繋と協力をもとにして発展を考える必要があります。自分達だけの殻にこもることなく、すべての分野の人々と交流するおおらかさが求められる分野と存じます。また工学でありますからあくまでも実用を目的とした理論であり実験であり研究であるべきものと信じます。

さて当研究会は今迄常任委員を中心とする事務担当の方々の献身的努力によって安い会費で親しみやすい行事を数多く実施して参りましたが、そろそろ限界にきているようです。いわゆる10人のさむらい達も年をとって今後10年間で可成りの交代が必要になりましょうから、徐々に若い世代の各分野の方々に出て頂いて引継ぎが無理なく行なえるよう組織と運営を考えてゆきたいと存じます。唯余り若い内から学界の事務的世話に没頭することは能力の浪費にもなり好ましいことではありませんから、やはり50才代が御世話をして40才代が助けるという構成が好ましいのではないのでしょうか。

会の一番大きな仕事はよくいわれるように会誌の発行でありましょうが、情報過多の時代に如何に整理された形で研究の成果を知り、知識を学び保管しておくかは会誌の形態として検討すべき問題かと存じます。たとえば大学会誌では各個人にとって必要な情報は全体の1割にもみたくないのではないのでしょうか。当会誌でも各個人にとって本当に読みたい記事が半分には満たないとすれば、詳細な論文は発表者の負担でマイクロフィッシュかゼロックスコピーにでもして保管し、会誌には2頁程度の要約をのせることもそろそろ検討すべきではないでしょうか。そして会誌はバラバラにして必要な頁のみをファイルする方が便利かもしれません。

人生の価値観が低成長あるいは資源欠乏の時代へと移行して変革をとげつつある時、小さい学術団体とはいえ、その活動方針も事務処理方針も再検討を行ない、時代を先取りした身軽な運営にのりかえるべきではないかと思う次第です。そのために事務局も業界中心の日本粉体工業協会と合同して運営し、諸経費の節約と仕事量の年間平均化による職員の節減をはかっております。そして工業協会と本研究会との産学協同によって個人的むすびつきから網の目のような多元的結合へと発展し、基礎研究から開発研究さらに生産運転に到るまで多数の組織化が進展することを期待いたします。そのような状態になれば基礎研究も現場の要求に敏感に対応して活気をおびるでありましょうし、装置製作および製品生産の現場は基礎知識および研究成果のバックアップを常時うけてトラブルも少なく、改良と新開発に邁進できることでしょう。このような信じ合える組織へと本会を高めてゆくことが今後の夢ではないかと考えております。

最後に粉体工学の国際交流の問題があります。日本は地理的にも言語的にも一番不利ではありますが、もっと人的ならびに論文上の交流を心掛ける必要があります。そのためには国内における有機的な連絡によって、最も効果的な交流を無駄なく進めるのに当研究会が一役かってゆくようにしては如何かと考えておりますし、現状でもある程度の情報の交換は行なわれて成果をあげていると思います。(京都大学工学部教授 本会々長)